名瀬小だより

2月号

学校教育目標
自分・友だち・まちがすき
自ら学び　未来へとかがやく名瀬っ子
～自他を認め合い、自ら考え行動する～

令和４年１月３１日
横浜市立名瀬小学校
校　長　　中嶋　孝宏

ふるさと（故郷）に思いを馳せる

副校長　太田　理絵

今年の立春は2月４日。節分は2月３日だそうです。節分は、「季節を分ける」という意味があり、ここ名瀬の地もまだまだ寒さは続いていますが、晴れの日に吹く風は、だんだん春の匂いに変わってきていると感じます。

東日本大震災からもうすぐ１１年。一昨年教員研修の取材で福島県富岡町や三春町に行き、富岡第一・第二小学校や中学校、三春分校の先生方から震災当時の学校の様子や子どもたちの話を聞いたり、未だ避難困難区域になっているところに実際に入ったりして現状を見せていただく機会がありました。横浜にいると復興はすでに終わっているように思いますが、東北の地の復興への取組は、まだ続いていることを改めて感じた取材でした。

東日本大震災から私には忘れられない曲があります。『釜石の奇跡』で注目を集めた釜石東中学の生徒が作詞に携わった「いつかこの海を越えて」という曲です。生徒の7割は津波で自宅が流され、校舎も失うという逆境の中でも、生徒たちは釜石市民に親しまれてきた『かまいしの第九』を全校で歌い上げ、多くの人の心を奮い立たせてくれました。当時、どうしたらこんな凄い合唱を作り上げることができるのだろうかと、楽曲制作に携わったアーティストのミマスさんは思ったそうです。制作するときには、生徒から歌詞の元になるような言葉を集めましたが、中には震災の辛い体験そのままを表現した言葉もあり、ミマスさんは涙を流しながら何度も読み返し、生徒たちの幸せな人生、被災された方の幸せな未来を願う歌詞を作ったそうです。生徒からは自分たちの住んでいる地名を入れたいという希望もあったそうですが、みんなの思いを全国の人たちにも歌ってもらうためには、地名は入れず、でも生徒の気持ちも大切にしたいと、歌詞の一番上の文字をつなぎ合わせて***「うのすまいでいきる→鵜住居（地名）で生きる。ゆめいだいていきる→ 夢抱いて生きる」***と、歌詞にメッセージを詠み込んだと話していました。

う　の　す　ま　い　で　い　き　る

うれしさも悲しみも　大切な思い出も
のこらず輝いて　あすを照らしてる
すみわたる陽がそそぐ　ふるさとの風景に
また会えるその日を　つよく信じて
いつかこの海をこえて　僕たちは舟を出そう
出会いにあふれる　ひろいひろい世界へ
いまも心にひびく　友の言葉を胸に
希望の道をすすもう
るり色の海へ

ゆ　め　い　だ　い　て　い　き　る

夕凪と朝焼けが　なんどくりかえしても
目をとじればそこに　なつかしい笑顔
いつの日もそばにいる　たとえ離れていても
だから前を向いて　歩んでゆこう
いつかこの海をこえて　僕たちは舟を出そう
手と手をむすんで　信じあえた日々を
いつも心に抱いて　夢の灯りをともし
希望の道をすすもう
るり色の海へ

いつかこの海を越えて　作詞/作曲　ミマス
（YouTube 等で検索すると視聴することができます）

子どもたちは、この名瀬が『故郷（ふるさと）』になります。この曲にあるように、ふるさとの風景や友達と過ごした楽しかった日々がいつまでも心に残る。そんな温かな場所になるように、これからも感染症対策を取りつつ、子どもたちが豊かな経験や学びができるようにしていきたいと思います。今後ともご理解ご支援をよろしくお願いいたします。